



第1011号
2006年10月29日発行
日本聖公会東京教区
港区芝公園3-6-18
編集人 伊藤裕元

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.htm> E-MAIL: comm.tko@nskk.org
Phone: 03-3433-0987 Fax: 03-3433-8678 Diocese Office

◇10月の代祷・信施奉獻先
▽浅草聖ヨハネ教会日曜給食活動のため▽教役者緊急援助資金のため▽月島聖ルカ保育園のため▽こどものためのミニストリーの働きのため▽社会事業の日(特定25日10月29日)

▽MJM東京主催「テゼの祈りの会」が11月9日(木)10時半から12時半、管区事務所3F会議室で開かれる。講師▽植松功さん(聖マーガレット教会)、参加費五百円。照会電話03(3394)4344。

▽立教女学院チャペルコンサートが小・中・高・短大各聖歌隊、中・高各ハンドベルクワイヤーにより、11月11日(土)14時から同学院聖マーガレット

礼拝堂で行われる。無料。照会電話03(5370)3038(月・火・木・金曜)。

◇秋のバザー11月

(教会名のあとの数字は開催時間)
4日(土)聖バルナバ 12~15
5日(日)聖ガブリエル 12~15
11日(土)茨十字(葛飾学園) 11~14

今週・来週の予定
10月29日~11月11日

- 29(日) 聖霊降臨後第21主日
主教巡回
聖オルバン教会
- 31(火) 教区企画室
礼拝音楽委員会
- 11月
1(水) 教区墓地礼拝(各地)
エルサレム教区
協働委員会
- 2(木) 教区墓地礼拝(各地)
- 5(日) 聖霊降臨後第22主日
主教巡回 聖マリア教会
- 7(火) 銀座朝祷会
- 10(金) 職員会議
広報委員会
- 11(土) 信徒講座:聖書の学び
(アンデレホール)

私は中高生時代を沖縄で過ごした。沖縄には『命どう宝』という言葉がある。これは命こそ宝、という意味である。世界では戦争があちこちで起こり、近年では凶悪な犯罪事件が絶えない。このような知らせを受けるにつけ、命の問題について考えさせられ、命の大切さを痛感させられる。さらに身近なところに目を向けてみると、自分自身も心身の悩みのあるまじり、自分が存在価値のないもののように思われたり、命を粗末にするようなことを考えたりしたこともある。そのような時に出会ったのがこの言葉である。今でも思い悩んだり、辛い時にはこの言葉を思い出し、神様から与えられた命を大切に

——《恵みに生かされて》——

命 どう 宝
松本 誠

にしなければ、と思いを新たにするのである。先日祖父が96歳の天寿を全うした。その表情からは激動の時代の中で与えられた命を精一杯生きた満足感に満ち溢れていた。私も祖父のように精一杯生き、命を大切にしたい。それは沖縄の人たちが『命どう宝』という言葉を通じて、孫に伝えているのと同じように、昨年与えられた娘にも、また後世にも伝えていきたいことである。

(三光教会信徒)

【本欄には教役者・信徒(教会・礼拝堂)ほぼ交互に登場していただいています。順番は広報委員会部内ルールで決め、信徒執筆者の選定のみ当該教会・礼拝堂に委ねています。】

(この用紙は再生紙を使っています)

常置委員会報告(10月20日)

主な協議事項

*第一〇三(定期)教区会に提出する07年度教区予算について、財政委員長から教区予算案算出明細書などの説明を受け、今後の見直しを含め協議・検討した。複数神学生の卒業で教役者俸給が大幅に増額するため、教区費分担金の増額が必要となるが、各教会献金額の減少傾向を考慮し、同分担金額は06年度のまま、(伝道牧会資金の取り崩し)のみによる予算案を了承した。

▽エルサレム教区との交流プログラムをつづけている東京教区では来年夏、現地の障害者施設にボランティアを送ろうと、「**工教区協議委員会**」(委員

長・神崎雄二司祭が先方と協議を進めている。交流の実を挙げるため、計画の段階から参加可能な人を募集中。詳しくは「**工教区ボランティア希望者募集**」案内(各教会・礼拝堂宛送付済)を参照。照会などは神崎司祭(聖救主教会)または教区宣教主事宛に。締め切りは年末。

▽聖路加国際病院礼拝堂の恒例「**オルガンコンサート・夕の祈り**」が11月1日(水)18時半、19時から行われる。演奏者はダグラス・クリーヴランド。入場無料(会場献金)。

▽聖マーガレット教会・マーガレット会は**日光真光教会訪問の旅**を11月8日(水)に行う。同教会聖堂で聖餐式の後、紅葉狩りなど親睦のバス旅行。

《今、この教会では…》

目白聖公会

毎主日のようにお迎えする新来者。当教会では、新しい方に少しでも教会に続けて通っていただけのように、見守り、サポートをする会を立ち上げようという動きが出てきた。その準備会を20数名で開催。新来者が教会で戸惑う場面は？必要な声かけは？など、新来者の立場に立って従来の対応を見直し、アイデアを出し合った。また信徒側の受け入れ態勢作り、笑顔で挨拶し合える教会に、などの意見も。話題は教会の使命・宣教姿勢へと広がる。こうした会合の積み重ねが重要だろう。訪ずれる人がまた来たいと思う教会を目指し祈りつつ。(伊東久美子)

【学びと働きから】²⁵

オウルリムの旅を終えて

大韓聖公会ソウル教区を訪問し、同教区の人々との交わりと、野宿者や外国人労働者に対する社会司牧の現場での学びを目的とした『オウルリムの旅』(教区正義と平和協議会主催)は、10月13日～16日の4日間、21人の参加者(内聖職者5名)により実施され、参加した。

日程的にも内容についてもギュッと凝縮された濃密なものであった。大韓聖公会が教会の使命である福音宣教をどのように理解し実行しようとしているかを、参加者はそれぞれに意義深く受け取っていった。

主な訪問先は、ソウル駅を中

心に野宿者の支援活動を行っているタシソギ(「再び立ち上る」の意味)センター、南陽州の教会にある在韓外国人労働者支援活動のための施設シャロームの家、そして明洞大聖堂の主日聖餐式への出席、オモニ会との交流会、西大門刑務所跡や民主化のための犠牲者・殉難者のための墓地訪問…。

「韓国の聖公会の熱さ」、その熱さにつながるものとして強く感じられたのは教会から発せられるメッセージにブレがないということだった。大韓聖公会の社会司牧のあり方を説明した総務部長金司祭、タシソギセンター所長の林司祭の言葉はもとより平日早朝、主日の聖餐式など説教においても一貫しているのは

「イエスが共にいたのは貧しい人、小さくされたものたちである」ということであつた。行政の社会福祉の整備が不十分な状況の中に、小さきものの側に立つことに一貫して働いてきたこと。あくまでも信仰に基づいて行動していることが熱さや強さにつながっていた。

韓国の社会状況が全て日本に当てはまるわけではない。だが今、私たちが直面している社会の現実の中で、教会がどのようなメッセージを発信していくのか、そのブレのないメッセージを共に考え、実践していくことが福音宣教の力になっていくのではないか。そのように感じた旅であつた。

執事 須賀義和